
ドイツさんと私

タナカハナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドイツさんと私

【Nコード】

N0649Z

【作者名】

タナカハナ

【あらすじ】

見た目小学生のOL鈴木麦子が家に帰ると、そこにはなぜかゴリラ——のようなドイツ人。どこかすつとぼけた日本語を話すドイツ人と、文字通りの意味で振り回される麦子との恋愛とビールと何かの日々。●実際の人物とはまったく関係ありません ●ドイツ語は適当です ●主人公編四話完結。ドイツ人編六話完結。現在番外連載中

玄関にゴリラ

ある日、家に帰るとゴリラがいた。

しかも、うちの玄関ポーチ。仕事柄目を使いすぎたのかな、思
って擦ってみても、そのゴリラは一向に消えない。消えないどこ
か、すごい存在感を発している。

目算で身長二メートル弱。清潔感のある白いシャツからちらりと
見える腕には、むきむきの筋肉。

——ん？ 白いシャツ？

どうしてゴリラがシャツなんか着ちゃってるんだろう、と近くに
寄ってみる。すると、私のその気配に気がついたのか、それはくる
りと振り返った。

「コンバンハ！」

しゃ、しゃべったあああ！

どこぞで目にしたCMかくや、というテンションで、私は口を開
いたそれを見上げる。

ポーチに取り付けられた暖色の灯りの下、きらきらと光る金色の
髪。私を見詰める瞳は綺麗な青色。

つまり、ゴリラはゴリラではなく、ただのかい外人だったのだ。

「こ、こんばん、は？」

だがしかし、なぜこの巨大な外国人がうちの前に居座っているの
か、という疑問はまだ解消されていない。

ものすごく威圧感のあるその顔を見上げながら、とりあえず私は

当たり障りない挨拶を返す。そして、じりじりと警戒心を露わにしながら玄関へと歩み寄った。うお、近くで見るとさらに巨大！

「隣に、来ました。オミヤゲ？」

なんで最後に疑問型、と心の中で軽く突っ込みつつ、外人が差し出すそれに視線を落とすと。

なんとということでしょう！

どこかの番組ナレーションのような感想が、頭の中を駆けめぐった。外人が手にしているのは、あきらかにワイン。しかも、白。そしてドイツ産。

一瞬にしてそれだけの情報を読みとった私は、自然とにやける顔を直しつつ、差し出されたそれをうやうやしい仕草で受け取る。

「わざわざご丁寧に、ありがとうございます」

よそ行きの顔で笑ってみせると、なぜか外人はその白い頬をうつすらと染めた。顔とがたいに似合わず、照れ屋らしい。

にしても、でかい。近くで見れば見るほど、遠近感が狂う。

鍛え上げられた体躯はよけいなものの一切ついていない筋肉質。

それはボディビルダーのような不自然なものではなく、どちらかといえば軍人さんのような、持久力ありますって感じの付き方。私の好みだ。

その上に乗っかっている顔も、いかにも外国人ですっていう彫りの深さ。整ってはいるのだけれど、いかつさが全面に出ているため、これ絶対子供泣くよねっていう仕上がり。もったいないなあ。

薄い金色の髪は短く整えられ、青い瞳が少し柔らかく私を見つめていた。

ん？ そういえばなんで見つめ合ってるわけ？

「あのう、ええつと……」

「オリヴァーです。オリヴァー・ロルフ・ビルケンシュトックです。ドイツから来ました」

「オリヴァー、さん？」

「オリーのフロインドウ、オリーと呼びます」

フロインドウってなんだよ、ドイツ人。

よくわからないけど、とりあえず笑つとけ、と再びよそ行き笑顔をむけると、ドイツ人も今度は満面の笑みで答える。ただし、顔は怖い。

それが、私——鈴木^{すずき}麦子^{むぎこ}と隣のドイツ人、オリヴァー・ロルフ・ビルケンシュトックとの初遭遇だった。

引越しの挨拶にいただいたワインは、さすがドイツ産。

甘くて、スパークリングで、めっちゃうまかった。あんまし誉められたことではないが、近くのスーパーで同じ銘柄の値段を見てみれば、そこそこいいお値段。ダンケ、ドイツ人！

両親はともにアルコールを摂取しない人たちなので、二本あったそれはすべて私の胃の中に消えた。

小さなコップ半分のビールでも酔っぱらう両親から、どうしてこんな酒豪が生まれたのかはわからないが、ただで飲む酒ほどおいしいものはないね！

現金にも、そんなことでお隣さんを敬っていた私だったのだが。

「オカエリナサイ！　夕飯はおでんです」

なぜそのドイツ人がうちにいる！

会社から帰って玄関に入ったら、いきなり壁があった。というか、壁だと思ったら、件のドイツ人だった。

見慣れた玄関が、すんごく小さく見えるのは私の目の錯覚じゃないと思う。

品のいいグレイのシャツと黒いスラックスに身を包んだドイツ人は、私からの返答を待っているのか、にこにこしたまま動かない。いや狭い、狭いから。

「た、ただいま？」

「今日、ドイツのビール持ってきましたよ。コムギ、ビア好きですよ」

好きですかって訊いてよ、そこは。まあ、間違っではないけれどもさあ。ていうか、ドイツ産？ ドイツ産のビールって言ったか、今！

いやいや待て待て、落ち着け私。その前に正すべきことがひとつあつたぞ、ドイツ人。

「コムギってなに、コムギって。私は麦子！」

「ムギコはコムギ。ムッタア、オリーにコムギいいよって」

確実に五十センチは上にある理性的なゴリラ顔を睨み付けると、ドイツ人はいたずらを怒られたような表情をして、たどたどしく弁解する。

えらい低音のいい声でんなしゃべり方されると、殴りたくなくなるくらいに可愛いじゃないか。
というのはおいといて。

「つまり、お母さんがオリーに『麦子のことはコムギって呼んでいいのよ』なんて勝手なことをぬかしやがったと。そういうことでオーケー？」

「Ja！」

あの天然母がよけいなことを！

ただでさえ低身長に童顔のこの外見のせいで、不当な扱いを社会から受けているというのに。できれば、正しく「麦子さん」と呼んでいただきたい！

二十五歳の淑女らしく扱ってもらいたいんだよ、無理っぽいけどね、すでに。きょんととしてこちらを見ているドイツ人に、私は大きくため息をつく。ここは気を取り直して！

「オリー、おでんは初めてなの？」

「初めてです。ムツタア、オリーのうち来て、入れて言いました。オリーはとても嬉しゅうございます」

なぜ最後だけそうなる。

吹き出すのをこらえ、目をキラキラさせるドイツ人を従えてダイニングへと移動。本国にいる時、知り合いの日本人と日本映画で言葉を学んだという彼は、時々面白い言葉遣いをする。あえて、訂正はしない。

部屋に入ると、母はテーブルにおでん鍋をセッティングしているところだった。冬はこれこれ、これだよねえ。

あ、そういう重要なことをさっき聞いた気がする。

「ドイツビールあるって？」

「あら、おかえりなさい。オリーちゃん、誘っちゃったあ」

「ああ、うん。今さら言われなくてもすごい存在感あるしね」

私と母のやり取りをにこにこしながら見ているドイツ人は、やっぱりいいかい。

これで「悪い子いねがあ！」って来たら、なまはげに勝てる。ぶっちぎりで。

「コムギ、ビーアはここです。オリーのダチ、送ってくれたよー」

「おっ、オリー、すっかり『ダチ』をマスターしたね」

「した！」

誉めて伸ばす。うん、成功成功。

初めて会った時にドイツ人が言っていた『フロインドウ』ってのがわからず、辞書を引いた私。それが日本語で言うところの『友達』だとわかって、斜め上に教えました。いいんだ、『ダチ』って格好いいし。

まるで忠実な大型犬種のように、できたできたと喜ぶドイツ人の腹を、よしよしと撫でてやる。できれば頭を撫でてやりたいところだけれど、悲しいことに私の手が届くのは腹あたりまでだった。屈辱！

それをくすぐったそうに受けていたドイツ人。何を思ったのかそのでっかく厚い手で、お返しとばかりに私の頭を撫で回してきた。ちよ、やめ、首が首がぐくぐくするから！

「あらあ、仲良し！ 素敵ねえ」

「お母さんっ、止めてっ！ 止めてよ、私死ぬから！ 頸椎けいついやられて死んでしまうから！」

「コムギ、バカかわいいですねえ」

「いやそれ嬉しくないから。全然嬉しくないかんねっ！？」

なんとかその手の下から抜け出した私は、とにかくまずは着替えしてくる、と慌てて自分の部屋へと一時避難したのだった。

おでんとすき焼きとソーセージ

「いただきまーす！」

部屋着に着替えた私が食卓につくと同時に、三人手を合わせて鍋に一礼。ちなみに、部屋着がユニクロの子供用だということは、私だけの秘密だ。

さっそくビールに手を伸ばす私を、それを持ってきたドイツ人は嬉しそうに見ている。

「コムギはドイツの人みたいですね」

「まあ、負けなくらいにビール好きなのことは認めるよ」

日本人がドイツドイツと呼ぶ国は、本来は『ドイチュランド』と発音するらしい。

このムキムキのドイツ人が、『ドイチュ』と口にする様は、激しく可愛い。チュってもう、ねえ？

そのドイツ人も持参した馬鹿でかいジョッキでぐびり、とビールに口をつけた。彼が言うにはこれが普通サイズとのことだが……あなどれんな、ドイツ！

にしても、うまい。

ワインに引き続き、これだって輸入食品を扱う店に行けば、けっこうな値段するぞう。しかもわざわざ本国から送ってきたって。もしかして、金持ち？

ちくわぶの熱さに、はふはふ言いながら涙目になっているドイツ人を横目で見てみると、何を思ったのか新しくビールを開けて差し出される。

そうかそうか、あんたの中では私はそういう生き物か。よし、ありがたくいただく。

「麦子ったらあ。本当に、誰に似たのかしらねえ。こんなちっちゃいのに、そんなにどこに入っていくのかしら」

「ちっさい言わないっ」

「コムギ、バカ可愛いですよ」

「フローローになってないっ」

お客様の中に、ツツコミの方はいらっしやいませんか！と叫び出したくなるような惨状に、今はここにいない父の存在を思う。が、よく考えれば気の優しい父は常識人ではあるが、天然おっこの母にさえツツコミをいれられない人なのであった。

しかたなく、昆布を口に放り込みながら考える。ここは話題転換を要求しよう。うん、それがいい。

「ねえ、オリーは日本でなにやってる人なの？」

なぜかおでん鍋の中に入っているソーセージを箸で器用につまみながら、ドイツ人は私の問いかけにこちらを見る。ドイツ人とソーセージ。絵的には間違ってる。

どうせ母が『ドイツソーセージ』くらいの短絡的な勢いで、普段は入れないそれをぶちこんだということだろう。味は悪くはないけどさ。

「オリーは、守る人です」

「守る人？ なにそれ、何から？」

なぜか甲斐甲斐しく手渡された三本目のビールを飲みながら、私は首を傾げる。

ていうか、おまえは私の嫁さんか。ふたまで丁寧に開けてくれるから、私は飲むだけ。それでいいのか、ドイツ人！

「タマが飛んでくる。オリーはそれから、守る人です。仲間に指示します。怒ります。蹴り返して、仲間助けます」

うええええ。なにその危険なお仕事。

そのがたいからして、どうやっても堅気のお人じゃないとは思ってたけれど、それはつまり――。

「まあ、かつこいつ。SPねっ、SPなのねえっ」

「SP？ オリー、GKですよ？」

「ドイツではそう言うのかしら？ 身体をはるお仕事なのねえ」

もつと食べなさい、と何やら感激しきりの母が、ドイツ人の皿に大根やらはんぺんやらを特盛りにする。

SPかどうかはともかく、このドイツ人が何かの警備員らしいってことはわかった。

見た目はともかく、意外と細やかで優しい彼がそんな荒事を生業にしているとは、意外である。怒るところなんて、想像もつかないけれどねえ。

見慣れてくると多少可愛く感じられるその笑顔を見つめていると、何を思ったのかドイツ人、今度は袋の中からワインを取りだしてみせた。

「ヴァイスヴァイン？」

「オリーは私を正しく誤解しているよ！ いただきますっ」

文句は忘れず、しかし私は素早く立ち上がって食器棚からワイングラスを二脚取りだし、目の前に置く。

心得ているとばかりに見事な所作で手早くコルクを抜いたドイツ人が、なみなみとそれに淡い金色の液体を注ぎ、私たち二人は気分良く杯を持ち上げた。

「こういう時、ドイツではなんて言うの？」

「プロースト！」

嬉しそうにそう言う彼につられて、私も思わずにっこりと笑う。

「プロースト！」

そんなこんなで始まった、いかついドイツ人との近所付き合い。その私たちふたりは今、なぜか近所のスーパーで一緒に買い物なんかをしてしまっている。

しかも、まるで恋人のように手まで繋いでいる。な、なぜ？

隣で口笛を吹いてご機嫌なドイツ人を恐る恐る見上げると、それに気がついた彼はますますその笑顔をきらめかせた。

こらこら、そこらの子供さんが顔を引きつらせていますよ、ドイツ産なまはげに。

「ムッタアが、今日はスキヤキですよ。お買い物、行って来い！オリー、スキヤキの歌、歌います？」

「歌わんでいい、てかスキヤキの歌ってなんぞ！」

ぶんぶんと繋いだ手を振るドイツ人に、私は文字通り振り回される。やめれ！

合わさった手のひらの大きさもそうだが、歩幅もずいぶん違うはずなのに、気がつけばドイツ人は私に合わせて歩いていてくれた。

それに気付いて、なんとなくそわそわする。この小学生的外見から、今まで学校や会社ではさんざん子供扱いはされてきた。けれど、こういう風に女の子扱いされたことはない。欧州のエスコート術なのか！？

しかし、所詮はゴリラと見た目小学生。スーパーに入ったときから、周りの目が痛い。

なんていうか、「あれは親子？」「いや、違うでしょう」「みたいな会話がね、背中から聞こえてくるわけですよ。

うつ、早くお買い物すませて返ろう。

「ええつとオリー、野菜から行くよー……」っておい！ 何してんの！」

渡された買い物メモを見ていた私がそう言って、静かになった隣を見てみれば、店内で目立ちに目立ちまくっているドイツ人の姿はソーセージコーナーの前。お前はパブロフの犬かつ！

慌ててそちらに近寄って行くと、その気配を感じて振り返ったドイツ人の瞳がすっごく輝いている。もう眩しいくらいの青い瞳。

「コムギ！ これ素敵ですね！ ゲートウシェーン！」

「はあ？」

野球のグローブかと思えるほどにでかいその右手に握られていたのは、まさかの子供用ソーセージ。魚肉。しかも、戦隊もの。

まだ隣の女の子向け魔法少女にひかれなかっただけ、マシなのか？

「これ、カコイイ！ コムギ、買って！ 買って！」

「どこのお子様なのよ……」

ものすごい勢いでアピールしてくるドイツ人に呆れた視線を送るが、当人はどこ吹く風でこちらに迫る。だから、遠近感狂うからそんなに近付くなって。

「そんなの、高い割には中身があんまし入ってないし、却下」

「悲しゅうございますよ！　オリーはこれが必要なものだと考えます。素晴らしいデザイン、オリジネル！　中には四つ。ファータア、ムッタア、コムギにオリー。最高です。仲良しの証ですね！　いかがですか？」

「いかがですもなにも」

あなたはなぜスーパーのソーセージコーナーで、とどろく美声を使って演説なんかを始めちゃったりしているんですか、と小一時間こっちが問いつめたいわ。

さっきまでは怖いもの見たさだったお客さん達が、あまりのくだらないこのやり取りに、くすくすと笑い声を漏らしている。

期待に満ちた顔でつきだされたそれを受け取るかどうか迷っていると、くいつと服の裾を誰かに引かれた。

驚いてそちらを見れば、小学生低学年の男の子がひとり。何だかしたり顔で私を見詰めている。

「姉ちゃん、買ってやれよ。可哀想だろうが！」

哀れむような瞳を向けられたドイツ人は、わかってるんだかわかってないんだか、思わぬ援護射撃に大きく頷いた。なにこれ、私悪もんくさくない？

頼んだぞ、となぜか偉そうに言い置いて、同じソーセージを掴んだ男の子は、先で待つ母親のもとに走っていく。た、頼まれてもな

あ。

「コムギ……」

「あーもう、わかった！　ひとつね、ひとつだけだからねっ」

やけになつてそう叫ぶと、オリーはぱつと顔を輝かせ、突然私の身体をぎゅうつと抱き込む。ええええ。

大きな背中を折り曲げて私を胸の中に閉じこめると、頭のとっぺんに頬をすりすりとすり寄せてきた。

ちよ、ちよ、ちよ！　あの、なんか心なしか私の身体、地面から浮いてますよね！？

「Ich liebe Dich、コムギ……」

「わわわわかった、よくわかんないけどわかったからっ」

「Sei doch immer bei mir nahe
um Greifen……」

ええい、何を言っているのかわからん！　ジャパニーズプリーズ！

ドイツ人はじたばたと暴れる私の身体をそつと離すと、少しだけ頬を染めて微笑む。その青い瞳がなんだか熱っぽく私を見つめるのは、なんでだろう？

呼吸的な意味で真っ赤になった私に、再びそのいかつい顔が近付いて、そして。

ちゅっ。

鈴木麦子二十五歳、初めてのキスは近所のスーパー。しかも、ソーセージコーナーの前でした――。

日独同盟破棄！？

「日独同盟を破棄したい。切実に、ものすごく！」

日本酒の入ったコップを割れない程度にがつん、とこたつの天版に叩きつけ、私は隣に座るでかい生き物を睨み付けた。

ダイニングから続く居間、テレビの前のこたつにて。なぜか満足げな顔をしたドイツ人は、心得たように私のコップにお酒をつぎ足している。いや、間違っ
てないけどそうじゃないっ。

「みかん、おいしいですね」

「田舎からの直送だぞ、当然！……じゃなくて、ちょっと近いっ」

そもそもこたつって四面あるじゃないの。どうしてわざわざ隣に座るのかなあ！？

しかも、無理矢理隣に身体を押し込んできたドイツ人は、ぎゅうぎゅうと私に寄ってくる。おいこら、懐くんじゃないっ。

「狭いつ！ オリーはあちに座ってっ」

「狭い？ オリーは狭くないですよ？」

でっかい手でちまちまとみかんの皮をむくドイツ人は、私の言うことがまったくわからないとでもいうように、ことごと首を傾げてみせた。か、可愛くなんかないんだからねっ。

「誰があんたの意見を訊いた！ 私が狭いのっ。潰れるのっ」

その言葉にドイツ人は大きく頷くと、むき終わったみかんを黙ってこちらに差し出した。反射的にそれを受け取ると、私はなぜかそのまま彼に抱き上げられてしまう。ええええええええ！

両脇に差し込まれた大きな手のひら。それがふわっと私の身体をいとも簡単に持ち上げる。そうして自分の足の間へと私を降ろし、そのごつつい腕が腹にぎゅっとまわって、拘束完了。

「これでコムギ、狭くないですね？」

「ばばばばばば」

あまりのことに、罵声さえ出てこない。

それをいいことに、ドイツ人は私の耳にやたら可愛らしいリップ音を響かせてキスをした。なんだこれなんだこれなんだこれ。

そして、匂いを嗅ぐように首筋にその高い鼻を埋められたところで、私はギブアップ。あぐあぐと白いタオルを求めて、ちょうど追加のみかんを持ってキッチンから戻ってきた母に、必死に手を伸ばす。れ、レフリーー！

「あらあ、素敵！ 昔のお父さんと私を見てるみたいっ」

「娘の貞操の危機だっつの！ ここは怒るところだから！ ボケるところじゃないからっ」

「えー？ だって、ハーフの赤ちゃんて天使みたいでいいわよねえ？」

「オリー、頑張りまするよ！」

「あんたは余計なところに参戦すんなっ」

首にキスしてくるドイツ人を、手のひらで押しのけて、私は叫ぶ。するとそれ以上のことはせず、彼はとろけるように甘い笑みを私に向けた。自然と自分の顔が赤くなるのがわかる。く、悔しい。

「に、日本酒、おかわりっ」
「Ja！」

あのあと、なんだか客室にお泊まりしていたドイツ人に私が叩き起こされたのは、次の日の朝。日曜日の七時三十分。正気の沙汰とは思えない。私の日曜日を返してよう！

ていうか、未婚女性の寝室に勝手に入ってくるって、あんたの国は騎士の国だろうがっ。

「コムギ、早く早く。始まりますよ！」

「ううう、何がよ……？ って、ちょ、抱き上げるなっ」

何かそわそわしているなと思っていたら、なかなか起きあがらない私に焦れたドイツ人は力業に訴えた。

つまり、パジャマ姿の私をベットから抱き上げ、そのまま階段を下りて居間へと向かう暴挙に出たのだ。小学生体型とはいえそれなりに重いはずの私を抱えても、ちっとも危なげのない足取り。素早くテレビの前までやってくると、こたつの中に私を押し込んだ。

そして、キッチンからオレンジジュースを持ってきて私に渡す。

そのまま当然のように私を背後から抱き締め、彼もこたつへと足を伸ばした。待て、この位置はもう決定なんですか。

寝起きの頭に次々と浮かぶ疑問は、あわあわという不明瞭な言葉でしか出てこない。そんなことにおかまいなし。ぷちん、という音とともにテレビを点けると、ドイツ人は私の頭を顎でぐりぐりと撫でてきた。

痛い痛い痛いってばっ。

「ソーセージ、始めますね」
「意味がわからない！」

画面を太い指でさすドイツ人に不機嫌を伝えつつ、私はオレンジジュースを一口飲む。気遣いのできるいい人ではあるんだよ。ちょっと斜め上に行きがちだけど。

まだ眠気の取れない目をごしごしと擦っていると、どこから出てきたんだか、まだほかほかしている濡れタオルで顔を拭われた。なんか、介護？

少しずつ覚醒していく頭の隅でそんなことを考えていると、目尻にちゅっとキスされる。

ゆ、油断も隙もあつたもんじゃないね！

「ほら、コムギ！」

赤くなった頬を誤魔化すように首を振った私に、妙にはずんだ声でドイツ人が再び話しかけた。だから、なにがどうしてなんだというの！

促されるまま、仕方なくテレビに目をやった私がそこで見たものは――。

『あーいーとーゆーうきー！ かかげてーゆくーんーだー！ ライオンジャー！』

……ああ、ソーセージ。うん、ソーセージね……。

何が悲しくて二十五歳独身女性が、三十五歳ドイツ人と一緒に日曜の朝から戦隊ヒーローを見なければならぬのか。

そんな疑問に思いつき脱力してしまった私は、背後にある広い胸に背を預け、大きくため息をついた。その行動に何を勘違いした

んだか、より密着してきたドイツ人は、ライオンジャーについて一
所懸命説明をしてくれる。

「ライオンジャー、悪いと戦います。レツヒトウトフライハイ
ト！」

「うんうん、はいはい。ライオンジャー、かつこいいねっ」

いい加減あきれて適当にそう返すと、ドイツ人はなぜか一転、悲
しそうな顔になる。

まるでジャーマンシェパードがご主人に叱られて、耳と尻尾を垂
らしているが如く。あれ、でも今私、ちゃんと同意したでしょうが。
何が不満じゃっ。

「オリーとライオンジャー、どっち？」

「は？」

「オリーとライオンジャー、どっちが素敵ですか？ どっちを愛し
ていますか？」

ええええええええ。そういう話なの！？

口元は微笑んでいるけど、真っ青なその目がまったく笑ってない。
顔怖い、顔が怖いよ。

どう答えればこの地獄から抜け出せるっていうのっ。

「コムギ！」

ええいつ。

迫り来る悪鬼の如き顔に耐えきれず、私は思わずぎゅっとその首
に腕を回した。しかし、太い首に身体だ。膝立ちになって両腕を回
しているというのに、私では彼の身体を抱き締めきれない。

その鍛え上げられた固い身体の感触に、走り込みと筋トレを趣味

とする私はつい感動してしまった。胸板厚いなあ！

すると突然、強い力で抱き締め返される。ぐあああつ。さばおりっ、さばおりになってるってえ！

「ラブ注入！」

「どこで覚えたそんな言葉ーっ！ ていうか出ちゃうつ、内蔵が出ちゃうつ」

「コムギ、M o e c h t e s t d u m e i n e F r a u w e r d e n ! ? 」

「くくく、苦しいつてば！ もうっ、わかった、わかったつてばああああ！」

その後さんざん締め付けられてぐったりした私の顔に、ちゅっちゅとキスを降らせたドイツ人は、朝ご飯までしっかり食べて自分の家へと帰って行った。

この時、自分が何に同意してしまったのか、私はまだ知らない。なんていうか、ドイツ語なんて嫌いだっ。

モアフェイマスセレブゴリラ！

そんなこんなでひどい週末を送った、月曜の朝。

いつも通りに出勤した私は、隣の席の後輩がいそいそと机の下に何かを挟み込んでいるのを目撃した。あれは……グラビア？

「羊子ちゃん、羊子ちゃん、なになに、それ。沖縄消防団の半裸カレンダー？」

「いやだ、麦子先輩っ。いつ私がそんな破廉恥なもの持ってきまして？」

「先週」

お弁当組がお昼を食べる会議室で披露したことを、よもや忘れたとはいわせんぞ！

しかも、それはいまだこの残念な美人である後輩のロッカーに、思いつきり貼られている。どの口が言いかつ、と後輩をびよびよ口の刑に処した私は、改めて机の下の写真に目をやった。

それは、どこかで見たような、いかつい顔の外人が写ったポスタ！。

薄い金色の短髪に、青い瞳。高い鼻にがっしりとした輪郭。太い首に分厚い身体は、何かのユニフォームに包まれ、白い網の前で仁王立ちになっていた。なんていうか、浅草によくいる風と雷の神様っぽい感じ。写真なのに、威圧感が半端ない。んん？

いやあ、世界にはよく似た人間が三人いるっていうけれど、ねえ？

「あらっ、麦子先輩も好きですか、この人！ いい具合にムキムキで素晴らしいですよえ。この不動明王かってところが素敵……」

うつとりと舐めるような視線で、羊子ちゃんは机に挟んだその写真を見つめて言う。

普段から「細マッチョとかもうあり得ないです！ マッチョって単語に謝れ！」と憤慨する後輩は、無類の筋肉好きだ。

羊子ちゃん、お願いだから帰ってきて！ 現実には！

「いや、好きっていうか、なんかよく似た生き物を最近見かけるっていうか」

「えっ！ それ本人じゃないんですか？。彼、日本に長期滞在中なんですよ！」

「ち、違うと思うなあ。だって、その人警備の仕事してるって言うてたし」

俄然本気モードに入った羊子ちゃんをいなしながら、私は誤魔化すように笑う。

いやいや、まさか、ねえ。だってこれ、どう見ても有名人じゃないの。ばりばりに。

あのすつとぼけた日本語を話すドイツ人と、絶対違うって。違う違う。違うはずだ！

「なんか、飛んでくるタマから何かを守ってる人らしいよ。部下に指示出したり、蹴り返して助けるんだって。だから、こんな風に雑誌に載ってるわけないってえ」

「せせせせ先輩？」

前にドイツ人から聞いたことをそのまんま伝えた私に、羊子ちゃんがイケてるDJ状態に陥ってしまう。なにになに、どうした。

そして、がしりとおもむろに私の肩を掴み顔を近付けると、内緒話でもするようにひっそりと口を開いた。

「先輩、その人もしかしてオリヴァー・ビルケンシュトックさん、じゃないですよ？」

「え、オリーだけど？」

何で知ってるの、と私が訊き返そうとした瞬間。
羊子ちゃんが爆発した。

「のおおおおおおおおおおおおっ！」

幸いにしてまだ出勤ラッシュには早い時間だったため、遠くにいる営業部長がびくうつとこちらを振り返っただけで済む。

私は片手を上げ、何でもないことをアピール。部長は私にむかつて軽くうなずくと、またもとの体勢に戻ってくれた。いい人だなあ。当の羊子ちゃんといえば、思いつきり叫んだきり、そのまま真っ白い灰になっちまっている。叩いたら直るかな、これ。

しょうがなく、私たちが社内で密かに作っている、自主的運動部の合い言葉をささやいてみた。

「好きな痛みはっ？」

「筋肉痛！ って違あああうっ！」

反射的に反応して復活してくれた羊子ちゃんは、ひとりで見事なノリツッコミをしてみせると、ぶんぶんと首を大きく振って仕切直した。

「麦子先輩、よおおおく聞いてくださいね。そのオリーはですね、サッカー選手なんですよ！ しかも、超有名所ですっ。世界レベルですっ。モアフェイマスセレブ！」

なんだその怪しい英語は、と突っ込もうとして止まる。今、なんて言った？

サッカー選手で、有名人。しかも世界レベルで？ あのドイツ人が？

いや、だってあの人、日曜だって土曜だって家にいるし。そりゃあ、毎朝一緒に走り込みしたりしてるけど、基本仕事してるのかしてないのか怪しいところだし。

まあ、平日私が会社にいる間は何をしているのか知らないけどさ。お金にはまったく困ってもないみたいだけどさ。

「ないない！ 他人のそら似に違いないよ！」

「同姓同名のそっくりさんは、もうそれ本人ですから！」

「ただただって、このゴリラがサッカーしてるの見たことないよっ。身体は鍛えてるみたいだけど、基本自宅警備員だよっ」

「引退したんですよ、ついこの間。ドイツの名門クラブでずうっと第一GKで、しかもドイツ代表選手。なんでかすぐに来日して、どつかのチームの臨時コーチしてるはずですよ？」

「サッカー詳しくないし！」

ショックから回復した羊子ちゃんに代わって、今度は私がガクガクブルブルと震え出す。聞いてない。まったく聞いてない。

いや、ドイツ人は言ったつもりかもしれないけれど、私を含めて母も彼が警備の仕事をしてるって今の今まで信じてたんだよ。母はきつとまだ信じているよ！

油が切れたロボットののような動作で、私はショック状態のまま無言で席に戻り、ノートパソコンを開く。忘れよう。ここから一時間前の記憶を削除しよう。ええと、デリートボタンはどこだ。

「麦子先輩、それ電源入ってないです。それに、デリートキーをどんだけ押しても、現実が消えないですからねー」

冷静な後輩のツツコミが痛い。うつつ。

そんな風に始まった私の月曜日が、前日のごとく散々だったことは言うまでもない。あきらかに拳動不審な私を、同僚や上司は心配そうに遠巻きに見る。なぜか色々な菓子を献上されるのは、私の見た目があれだから。

いつもなら「Note！子供扱い」と断るが、今日はそんな余裕すらなかった。頭の中をゴリラ的な何かがぐるんと駆けめぐる。午後になっても立ち直れない私は、上司から早退命令を発令され、会社から帰されてしまった。しかも、なぜか羊子ちゃんがロッカーに常備していた、あのドイツ人の写真集なるものも持って――。

『オリヴァー・ビルケンシュトゥク 霊長類最強ゴールキーパー！』

会社から帰り、早々と部屋着に着替えてベットに転がった私は、羊子ちゃんから借りてきたその本をぱらとめくってみた。中身は意外と硬派な記事と写真が満載。いい太股だあ、とか思っただけ、多分。

そこに写っていたのは、雄叫びを上げているような顔。横っ飛びになってボールをキャッチしている姿。仲間と肩を組んで笑って、時にゴールに寄りかかり涙を落とす写真たち。

それは私の見たことのない、隣のドイツ人の姿だった。なんとなく、赤面。

恥ずかしさを誤魔化すように、私はひとりごちてみる。

「これ、本当にオリーなのかなあ」

「本当にオリーですよ」

「うわああああああっ」

こっそりとエロ本を見ていたら、母親に乱入されてしまった男子中学生がつてくらい、私はベットの上で跳ねる。かけられたその声に振り返れば、奴がいた！

だから、なんで、うちにいるの！ ドイツ人！

私は慌てて枕の下に写真集を隠そうとするが、間に合わない。それはさつさとドイツ人に取り上げられてしまった。

そしてなにやら真面目な顔で写真集と私を見比べると、満面の笑みになる。うわあ、嫌な予感しかない、この展開。

「本物がここにいますよ、コムギ……」

ぎしつとドイツ人の重みにベットが軋む。ななななんだ、この生々しい音っ。

寝っ転がった私の身体を、囲い込むようにのしかかってくるドイツ人に息を飲む。そつと、その手のひらが私の頬に触れ、親指がゆつくりと肌を撫でた。

ぞわり、と不快ではない感覚が背筋を駆け上る。

「フォートよりもオリーのほうが、ガンツグウート！」

そう言うなり唇に柔らかい感触。何度されても慣れない口付けに身体力が抜け、私はベットへと沈み込んでしまった。よくわからないけど、ずるい、と思う。

角度を変えて何度でも重なってくるそれが、いつの間にか私の唇を割って深く深く。何もかも飲み込むように、奪うように、どこまでも追いかけてくる舌。

酸素を求めてドイツ人のがっしりとした肩を叩けば、ものすごく

未練たらしく、最後に軽いキスを残してそれは離れていった。

甘く痺れる頭も身体も、筋肉質な彼の高い体温に支配されている。ざらりと耳に触れたドイツ人の顎。その髭のそり残しの感触にまで、反応してしまう。

「アレスクラア？」

上質のベルベットでも撫でているような低音を耳に吹き込まれ、私は意味もわからずがくがくと頷く。

そんな私にドイツ人は満足そうな笑顔をむけた。

大きくて固い手のひらが、乱れた私の前髪をさらりと撫でつけ、そのこそばゆさに私は少し肩をすくめる。

「Ich bin in dich verliebt」.

小さくささやかれた異国の言葉が切なく響いて、私はそつとドイツ人に手を伸ばし——むにとその頬を思いつきり摘んだ。調子に乗るでないっ。

多分真つ赤になっいるであろう顔のまま、四つん這いで私を覗き込むドイツ人を睨み付ける。それでもへらりと嬉しそうに笑うドイツ人は、もう本当にどうしようもない。

再びゆっくりと寄せられる唇に、私は今度こそ諦めてそつと目を閉じた。

モアフエイマスセレブゴリラ！（後書き）

ドイツさんと私、ここでいったん完結となります。

このあと、オリー視点のお話を続けようと思っていますので、よろしければそちらも覗いてくださると嬉しいですよ。

妖精との出逢い

初めて彼女を見たとき、俺の身体はパンツァーファウストの直撃を受けたかのように、ものすごい衝撃にみまわれた。

ドイツからほとんど身ひとつで来日して三日目の夜。

引越しの挨拶は大事だろうと、本国から持参したワイン二本を手隣の家までやってきたはいいが、チャイムを押しても返事はなし。そのまましばらく反応をうかがうが、どうやら留守だったらしい。

多少がっかりして、また後で来ようと振り返ったそこに、彼女がいた。

見るからに華奢な身体はぴしりとしたスーツで包まれ、一見して働く女性なのだとわかる。しかし、肩から提げた鞆のほうが大きく見えるくらい、彼女は小さかった。

自分が手をかざせば余裕で包み込めるほどに小作りな顔には、印象的な大きな黒い瞳。繊細な睫毛に縁取られたそれが、綺麗に切り揃えられた前髪の下から、警戒心も露わにこちらを見つめていた。が、と脳みそを揺さぶる衝撃。これは、まさか妖精か！？

「コンバンハ！」

反射的にかけた俺の声に、小さな彼女はびくうつと肩を揺らす。大きな瞳がさらに大きくまん丸くなり、魅力的な桜色の唇がぼかんと開けられた。

彼女はどうかやらこの家の住人らしい。警戒しながらも意を決したように、そろりそろりとこちらに歩み寄ってくる。

その姿たるや、まさに皇帝ペンギンのヒナ！

いや、むしろ俺の大好きなティディベアそのもの！

今すぐにも抱き締めて、自分の家まで持って帰りたい衝動を抑えつつ、俺はすぐそばまでやってきた彼女に持っていたワインを差し出した。

「隣に、来ました。オミヤゲ？」

その言葉に彼女の視線は俺の手元に落とされ、一瞬の後、ぱっと上げられた顔には大きな喜びが溢れていた。

輝かんばかりのその可愛らしい笑みに、俺の胸が不規則に脈打つ。おかしい。健康面に不安はなかったはずだが。

ぼんやりと彼女を見つめる俺にむかつて、小さな手がそつと差し出された。俺ははっと我に返り、袋を渡したところで細い指に指が触れ、再び身体にびりびりとした何かがほとばしる。不快ではない。むしろ、快楽に近いその感覚。

「わざわざご丁寧に、ありがとうございます」

そうして、ずいぶんと高い位置にある俺の顔を覗き込むように、彼女はもう一度につこりと笑顔を見せてくれた。

三度目の衝撃。

チャンピオンズリーグの決勝でPK合戦になった時にも感じなかった、興奮。息切れ。目眩の症状に、俺は自分の頬が熱くなるのを感じる。これは、もしかや……恋、なんだろうか。

できるならばこのまま、ずっとずっと彼女の姿を目に焼き付けたい！

そんな風にじっと凝視している俺に、彼女は少しいぶかしげに眉

をひそめ、困ったように声をあげた。

「あのう、ええっと……」

「オリヴァーです。オリヴァー・ロルフ・ビルケンシュトゥックです。ドイツから来ました」

すかさず自分をアピール。ナイスパンチングだ、俺。

絶対絶対絶対絶対、彼女に自分を覚えてほしい！

その小鳥のような声で自分の名前を呼んでほしい！

「Sie」なんてすつとばし、「du」と話しかけられたって、喜んでそれに応えよう！

「オリヴァー、さん？」

「オリーのフロインドウ、オリーと呼びます」

そう俺が重ねて言えば、彼女は少し考えた後、大人びた微笑みをこちらに向けた。俺も今度こそとびっきりの笑顔でそれに応える。

本国にいるときのよう、この可憐な妖精にどうか怖がられていませんように、との願いを込めて。満面の笑みで。

それが俺——オリヴァー・ロルフ・ビルケンシュトゥックと、隣の小妖精、鈴木麦子との運命の出会いだった。

そもそも俺が本国ドイツから、遠く離れたここ日本にやってきたのは、日常につきまとうわずらわしさから逃れるためだった。

長年人生の一部だったゴールキーパーという仕事を辞してから、

俺を追いかける記者たちときたら、やれいつ監督になるんだ、いつ結婚するのかとこうるさい。

心底疲れていたそんな時に会ったのが、かの有名な日本のアニメーション。

それは古き日本を舞台にした、心温まるファンタジー。二人の幼い姉妹がふくろうのような森の妖精と心を通わせる物語。素晴らしいすぎる！

俺は泣いた。三日ほど泣いた。号泣だった。

話自体もそうだが、俺が特に心惹かれたのは森の妖精。その中でも、あの小さい白いやつ。それがちょこまかと歩く姿は、俺のゴールマウスを見事に突き刺さった。

こんななりをしていても、昔から小さく可愛いものが大好きで、本当のプライベートな寝室にはこれでもか、というほどシユタイフ社製のティディベアが並べられている。もちろん、ひとりひとりに名前まで付けて。

幸い俺は独り者だし、金にも困ってはいない。そこで急に思い立つ。そうだ、日本、行こう！

そうして、取るものも取りあえず、俺は憧れの地日本へとやって来たのだった――。

『聞いてくれ、モトハシ。俺は昨日妖精に会った。いや、天使かもしれない』

「スタッフ、医療スタッフ！」

開口一番俺がドイツ語でそう告げると、クラブチームで一緒だったことのある元MFで現コーチのモトハシは、青ざめた顔でスタッフを呼んだ。

『なんだ、誰か怪我でもしたのか？ この大事な時期に』
『うん、なんか確実にひとり、痛いこと言ってる人がいるよね。俺の目の前に』

季節は冬だというのに、なぜか額から汗を流しながら、モトハシはわけのわからないことを口にする。思わずしかめっ面になった俺を見て、呼ばれて出てきたスタッフは一瞬にして回れ右。そのままスタッフルームへと戻っていった。

怖がられるのには慣れているが、さすがにちよつと寂しい。

あからさまにへこんだ俺を見て、モトハシは笑って肩を叩いた。

『すぐ慣れるって。時が経てばわかることがあるって言うだろう？』

「Ja, Kommt Zeit, kommt Rat.」

『そうそう、それ。せっかく日本語だつて勉強したんだし、どんな話しかけてみるって。特にキーパーたちなんか、おまえに憧れて目えきらつきらせてんだから。俺がお前を引っ張ってきた時なんか、しばらく俺、神様扱いされたもんね』

にやつと彼独特のいたずら坊主のような笑顔に、俺もつられて笑みをこぼす。

俺が今臨時コーチをしているこのクラブチームは、現在ドイツで言うところのツヴァイテリーガに位置している。

現役時代、日本から移籍してきたモトハシと俺とは、彼が帰国して引退してからも交流が続き、今回来日するにあたって色々世話をしてもらったのだ。

その中のひとつに今の住居もあったが、そう考えるとモトハシは俺と彼女の恋のキューピッドなのかもしれない。

ここはひとつ、モトハシの言うように日本語を使ってこの気持ちを伝えてみようか。うむ、それがいい。

「モトハシサン、オリー、あなたを大切にしたい！」

俺が最大限の感謝の意を声高に叫ぶと、練習場で柔軟をしていた選手やスタッフ一同が、一斉にこちらに顔を向けた。何か、見てはいけないものでも見てしまったかのような彼らの表情に、モトハシは泣きそうな顔で叫ぶ。

「ちがあああうっ！ 誤解だっ！ 誤解すんなあああうっ！」

感謝を受けて当然だというのに、謙遜をするモトハシは本当にいい奴だ。

日本人とは本当にシャイな民族だなあ、と俺は微笑ましくそれを見守るのだった。

妖精との出逢い（後書き）

オリー編、はじまりました。

彼の性格からして麦子の時とは違い、ちょっと固めな感じになるかとは思いますが、しょっぱなから一目惚れしてましたw

まさかのドイツ版オトメンです。また、しばらくお付き合い頂けると嬉しいです。

キスとみかんとミソズツペ

初めて彼女——コムギにキスをしたのは、近所のスーパーのウルストコーナー前だった。

『ずっと、俺のそばにいてくれ……』

そうささやいて、この胸の中に抱き締めた彼女の身体は予想以上に小さく細く、そして今まで感じたことのないくらい柔らかかった。強く強くそれを感じたいような、壊してしまいそうで怖いような、相反する幸福感に俺の頭はどうにかなくなってしまふ。

サッカーで鍛えた理性を総動員しようやく身体を離れた俺が、そつとコムギの顔を覗き込むと、彼女は可愛らしく赤く染まった顔でこちらを見上げた。

少し、非難するようなその瞳は、しかし俺のなけなしの理性をぶちやぶる破壊力を持っていた。苦しかったせいか、大きな黒い瞳がうるんで。

そして俺は、思わずその薄紅色の唇に自分のそれを重ねていた。信じられないほどの甘い、甘い感触。一瞬だけのその触れあいに、暴走しそうになる自分自身を抑え付けるにひどく苦勞する。

ここは人前だ。人前なんだ。押し倒すわけにはいかない。……多分。

何か他のことを考えろ、考えるんだ、オリヴァー。そう、ローマ教皇だ。教皇の顔を思い出せ！

「おっ、オリー？ 大丈夫？」

一瞬にして赤から青へと変わった俺の顔色に、恥ずかしそうに辺りを気にしていたコムギが慌てて手を伸ばしてくる。

さすがは教皇。想像以上の破壊力をもって、俺の中の悪魔を追い払ってくださった。気分は……あまりよくないが。

しかし、小さなコムギの手のひらが心配そうにお腹をさすってくれるのは、嬉しい。もしかして、これが試練を乗り越えた俺への恩恵か！

「コムギ、I c h l i e b e d i c h i m m e r u n d e w i g .」

永遠に君を愛する、なんてまさか自分が誰かに告げることになるうとは、今の今まで想像もしていなかった。

むしろ、そんな風に愛に夢中になっている奴らを、「イタリア人でもあるまいし」などと冷ややかに見たこともあった。そんな自分が、今や目の前の妖精に夢中。

その言葉に、コムギは仕方ないともいうような優しい目をして、ぽんぽんと俺の腕を叩いて頷いた。

「わかったってば。もう、早く買い物しないと遅くなっちゃうよ？」
「Ja!」

当然のように指しだした俺の手に、少し戸惑ったようなコムギは、それでもそうつとその手を重ねてくれた。潰さないように、傷つけないように、小鳥を包み込むような繊細さをもってその手を握る。

その時俺は確信したのだ。絶対に、彼女と結婚するんだ、と。

『ということで、日本式プロポーズの言葉を教えてくれ』
「またパンチングでゴール狙うようなことを……」

本屋でそれらしい本を買い込んだ方がいいが、自分が日本語は話せても読み書きがまだ完璧ではない、ということをしつかり忘れていた。

そう言つて、すべての本をどさつとモトハシの目の前に置く。すると彼は頭を抱えて机に突っ伏してしまった。既婚者である彼が頼りなのに。

ドイツであれば同棲したままの事実婚でもいいだろうが、ここは日本、そうもいかない。特に、コムギに対して俺はいい加減なことはしたくないのだ。

将来をしつかりと約束する前に手を出せば、あの優しい両親が心配するだろう。正直、このままでは俺の理性が保たない。

『……婚約して、彼女に早く手を出したい』
『いやいや、その本音は隠しとけよ!』

ぼそりと俺が呟けば、机から勢いよく顔を上げたモトハシが叫ぶ。そうして再び頭を抱えると、何かを思いついたのか、ばしりと机を叩いて立ち上がった。

「こういう時こそ、うちの選手たちだろう!」

「センシュ……シュピーラア?」

「そう、シュピーラア。その彼女と歳が近い奴らに助言してもらったほうがいいって。ラートだよ、ラート。そうすりゃ懇親にもなるしなっ」

「R a t……」

なるほど、そう言えば主力選手はみなコムギと歳が近い。意外と参考になるかもしれないな。さすがだ、モトハシ！

「ダンケシェーン、モトハシ！」

「ぐわあっ」

感謝を伝えるべく、俺は目の前のモトハシを強く強く抱き締める。何から何まで、本当にしてもしたくないくらいだ。

腕の中で照れて暴れるモトハシの身体をいったん離し、その頬を両手で挟み込む。そして、俺はドイツ人はあまりしないキスというやり方で、最大限の感謝を示した。

右に、左に、もう一度右に、とその時。

がちやつとミーティングルームのドアが開き、事務の女性が顔を覗かせた。彼女は俺たち二人を見て瞬間的に固まると、そのままそつとドアを閉めて出て行ってしまう。

『なぜだ、ササキサンが戻ってしまった。俺かお前に用事ではなかったのか？』

「うわああああああー！」

俺がモトハシにそう告げると、彼はなぜか叫び声を上げ、出ていったササキサンを追いかけて行ってしまう。現役時代と変わらず熱いな、モトハシ！

日本人は本当に仕事熱心だ、と俺は感心してそれを見送ったのだ。つた。

そんなことがあってから、数日後。待ちに待ったチャンスが俺の

前にやってきた。

コムギのムツティに「田舎からみかんが届いたの、食べに来て来て！」との誘いを受けたのだ。神は俺を見守ってくださっている！俺は多少よそ行きの服に身を包むと、いそいそと隣の家のチャイムを鳴らした。

少し間があつて開けられたドアから顔を覗かせたのは、毎日でも見ていたいほど愛しいコムギだった。ああ、今日もあの日本アニメの妖精のように、可愛らしい……。

「あ、オリー、早かつたねえ」

「グーテンアーベントウ、コムギ！」

「こんばんは、かなあ？」

「Ja！」

聞き取れたドイツ語に喜ぶ顔にすかさずキスを贈ると、コムギは手にしていた調理器具で俺の頭を軽く叩いた。照れる姿も初々しくたまらない。

こちらを睨み付ける彼女は、まるでコアリクイの威嚇姿にも匹敵する可愛らしさだ。

「もう、油断も隙もないなあ。早く入って！ おみそ汁火にかけたままなんだから！」

「ミソズツペ？」

ぱたぱたとキッチンにむかって駆けていく小さな背を追って、俺も今や自分の家並みに慣れてしまった廊下を抜ける。キッチンから続くダイニングに入ると、ミソ独特の匂いが鼻に届いた。

なんだろうか、この幸福感。この場所こそが人類の追い求めてきた樂園なんではないだろうか。そんな感激にひたりつつ、俺はこちらに背をむけて立つ彼女の背に近づいた。

「今日はコムギ、食事つくるですか？」

「みそ汁だね。お母さん、ご近所にみかんのおすそわけ行ってるけど、もうすぐ帰ってくるよ。あ、そこのお椀取ってくれる？ 三つね。お父さん、今日も残業だから」

真剣な表情で鍋を見つめるコムギが、こちらを見ずに指示を出す。これは……なんだかとても、新婚ほい！

俺は言われたとおり、食器棚から三つ分の木でできたお椀を出す。そうか、コムギのファーターアは帰っていないのか。できれば家族が全員揃ったところでプロポーズしたかったのだが、仕方がない。

「オリー、みそ汁よそうから、悪いけどあっちのテーブルに持っていつてくれない？」

「かしこまった！」

大まじめに頷いてみせた俺に、コムギはなぜか爆笑しながらお椀を渡す。「熱いから気を付けてね」という言葉だけで、天にも昇る心地だ。

結婚すれば、これが毎日……そう思うと、自然と気合いが入る。それに、昼間若い選手たちから教えてもらったプロポーズの中に、確かミソズツペに関するものもあったはず。

よし、それでいこう！

決意を新たに、テーブルにミソズツペを並べ終わると、俺はいそいそと再びコムギのもとへとむかった。

コムギのムツタアが帰ってきたところで、俺たちはダイニングで

の食事を開始した。

コムギの手料理、コムギの手料理、コムギの手料理。しかも、初めて味わうのだから、感激も深まる。

「オリー、みそ汁の味、大丈夫？」

一口一口大事に味わっている俺を見て、みそ汁が苦手だと誤解したのか、心配そうにコムギが訊いてくる。

ああ、もうだめだ。コムギのことが愛おしすぎて、我慢できない！俺はお椀と箸を置き、目の前に座る彼女の目をしっかりと見つめる。緊張のため、顔が引きつっているのがわかるが、仕方がない。

そんな俺の態度に何かを感じたのか、コムギとコムギのムツタも箸を置いて俺を見つめ返してくる。こんな緊張感は、W杯決勝でも味わえないだろう。

「コムギ、オリーは大切な話をします」

そう前置きをすると、コムギはかすかに首を傾げながらこくりと頷く。

こうなればもう、後には引けない。俺は昼間、チームの第一GKであるイリエに聞いたセリフを、必死に頭に思い浮かべた。

彼曰く、日本で最もポピュラーなプロポーズの言葉らしい。

それさえ言えば絶対に伝わる！と、モトハシも自信を持って後押しをしてくれた。もしもそれで駄目だったらと、第二案まで考えてくれたキーパーチームにも感謝。しかし、緊張でそのふたつのセリフを正確に思い出すことができない。

まあ、あとは勢いでなんとか伝わるだろう！ 大切なのは気持ちだ！

こくり、と生唾を飲み、俺は覚悟を決めてその言葉をコムギに放った。

「毎日みそ汁で、オリーのパンツを洗ってほしい！」
「無理です！」

一世一代のプロポーズは、その日、なぜか失敗に終わった。
やはり日本語は難しい。機会を見てまた明日、今度はドイツ語で
頑張ろうと、俺は決意を新たにしていたのだった――。

独日友好条約！

「オリーとライオンジャー、どっちが素敵ですか？ どっちを愛していますか？」

俺の軽い嫉妬に、情熱的な抱擁で答えてくれたコムギ。その柔らかい感触に、俺の理性は一瞬にして吹き飛んだ。コムギが、照れ屋のコムギが、自分から、俺に！

気がついたら俺は思いきりその細い身体を抱き締めていた。恥ずかしさに逃れようとするそのささやかな抵抗が、なお俺の欲望を煽っていく。

『コムギ、俺の妻になってくれないか！？』

顔を真っ赤に染め、俺の腕の中でおも恥ずかしがるコムギに、昨日言えなかったその言葉をささやく。やはり、母国語で話すのが一番伝わる気がするな。

俺のその懇願に、彼女は何度も何度も頷くと、くたりと力を抜いてこちらに身を預けてきた。心なしか上がっている吐息が、妙に色っぽい。

ああ、早く。早くこの奇蹟を俺だけのものにしてしまいたい！コムギの了承は得られたのだから、あとはファータアとムッタアに報告をして、それから日本ではどういう順序を踏むのかを教わらないとな。

「A n d e r e L ? n d e r , a n d e r e S i t t e n .
」、郷に入らば、郷に従えとはよく言ったものだ。

「おはよう、オリーちゃん。朝食食べていくわよね？」

「モルゲン！ ムッタア、恐^{おそ}れます！」

ひとときの熱い抱擁の後、照れたのか荒い息をしてぐったりとしてしまったコムギを残し、俺は一足先にキッチンへと足を運んだ。

もちろん、朝食を用意してくれているムッタアに、機を見て婚約の相談をするためだ。

やはり、これに関しては女親のほうがいいのだろう。

てきぱきとチーズオムレツやコンスープなどを並べていくムッタアを、それとなく手伝う。といっても、俺ができることといえば、出来たての料理をダイニングに並べていくくらいだが。

「オリーちゃんのところでは、朝はどんなものを食べるのかしら」

「ドイチュでは、朝と夜は冷たいです。温かいは、お昼。お腹空いた時、午前中にちよつと食べるますよ」

「あらあ。じゃあ、こういうのは嫌い？」

ほかほかと美味しそうな湯気をたてるオムレツを指さし、ムッタアは眉尻を下げる。それを見た俺は、慌てて首を振った。

「ムッタアの料理、レツカー！ おいしい！」

「そう？ ならよかったわあ。これが鈴木家のスタイルなの。だから、麦子と結婚したらこういう朝食になると思うのよねえ」

につこりと、俺を見上げてコムギによく似た笑顔を見せたムッタアは、ちらりと居間のほうを見ながらひそひそと続ける。

「麦子の指のサイズは、七号よ！」

「ムッタア……！」

「日本では婚約指輪を贈るのが、そこそこポピュラーなやり方なの。」

オリー、頑張るのよっ」

何も言わずとも理解してくれているムッタアに、俺は感激のあまり少しだけ涙ぐんでしまった。これで、ムッタアの了解はとれたも同然！

ファータアにはおいおい挨拶に来るとして、まずは指輪だな！

そう決意を新たにした俺は朝食をとってから家に帰ると、そのまま即行宝石店へと駆け込むこととなった。

「で、さっそく指輪を注文してきたって、そういうことか？」

「です！」

俺のプロポーズ大作戦に協力してくれたお礼に、キーパーたちにはみっちりとしたトレーニングを、モトハシには居酒屋での食事を贈る。

今日のトレーニングにイリエたちは、途中から涙を流して喜んでくれていた。指導する俺も、とても嬉しい。明日からずっとこんな感じでいこうかと思っていいたら、モトハシに慌てて止められてしまったのだが、なんでだろう？

俺は頼んだビールピッチャーを傾けながら、それをなぜか啞然とした表情で見守るモトハシに頷いてみせた。

『すぐにでも欲しかったんだが、こういうのは焦っても良いことはないからな。せっかくなので、俺とコムギが会った日付も一緒に彫ってもらうことにした』

『ああ、うん。おまえから“焦っても仕方ない”みたいな言葉が聞

けるとは思わなかったんだけどその前にちょっといいか』

モトハシの真剣な顔に、俺も手にしていたピッチャーをテーブルの上に置いて向き直る。もしかしたら、婚約指輪についてなにか助言があるのだろうか。

まさか、日本では指輪と一緒に選ばなければならなかったのか！？
だったら、もうひとつ購入することも検討しよう。いや、むしろ何個でもコムギと一緒に指輪を選んでみたい。

彼女の喜ぶ顔を想像して笑顔を浮かべる俺に、モトハシは呆れたように口を開いた。

『オリー、悪いんだけどビールのピッチャーってのは、ひとり分じゃないんだぜ？』

『何を馬鹿なことを。モトハシ、このピッチャーというのはどこからどう見ても、ひとり分だ。日本ではひとりワンピッチャーだろう？ 安心しろ、もうひとつちゃんと頼んである』

『ものすごく遠慮したい、その飲み方！』

まったくモトハシは……というか、日本人というものは慎み深い人たちだ。こちらの奢りなのだから、遠慮せずともいいんだが。

タイミングよく店員が持ってきたピッチャーを受け取り、俺はモトハシを安心させるように微笑んだ。

『俺とお前の仲だ。遠慮はするな』

「命の危険を感じる仲だな……」

ぼそりと日本語で何かを呟くと、モトハシは急にテンションを上げてピッチャー同士をこつんとぶつけた。

『もういいつ、とにかくオリー、おめでとう！』

『ありがとうモトハシ!』

そのまま一気に半分ほどあけてしまふ。これぞ、男同士の語り合いに必要なもの。

最初、日本のビールはなぜこんなに冷えているのだろうかと不満だった、今やこの冷たさが逆にいい。

頼んだヴルストやエダマメをつまみながら、ピッチャー三杯目になった辺り。とろんとした目のモトハシは、なんだか楽しそうに左右に揺れながら、ぱしつと目の前の机を叩いた。

「オリー、とにかくなあ、しーずーカーにいなんだぞおつ」

「しーずーカーにい?」

「そうだつ。相手はあ、一般人なんだからなつ。あんまし騒がしくしちゃ駄目だ! できるだけスマートに、静かに事を運ぶのが鉄則だつ!」

確かに、一理ある。

コムギはそんなに騒がしいことが好きではないみたいだし、ここはモトハシの言うように『静かに』行動したほうがいいのだろう。さすがモトハシ。いい助言だ!

「モトハシ、オリー、“静かに”行動しますよ!」

「それでよしつ」

再びプローストと声を上げ、俺たち二人はピッチャーを空にする。そしてその後、なぜかたったのピッチャー四杯でふらふらになったモトハシを、俺が家まで送っていくこととなった。あれだけで酔ってしまうとは、モトハシはよっぽど疲れていたに違いない。

それでも俺のために時間を作ってくれた彼に感謝して、俺は飲み足りなさにもう一軒、居酒屋へと足を向けた。

そしてそれからひと月後。指輪を受け取った俺は、静かに行動を開始した。

コムギのムツタアから聞いた住所を便りに、彼女の勤める会社に向かう。途中、やはりこれは外せないだろうと、花屋で真っ赤な薔薇の花束を購入し、俺はひたすら静かにひと言も話さずに、その扉を開けた。

「いらっしやいま、せ……!?!」

受付カウンターのような席にっていたコムギが、入ってきた俺の姿を目にとめて言葉を失う。

この日のために新調したスーツだったが、気に入らなかったのだろうか。俺は密かにそんなことを心配しつつ、けれどここまで来て逃げることは許されないと決意を新たに彼女へと歩み寄った。

コムギが立ち尽くしているのを見て、隣に座っていた同僚らしき女性もこちらに向き直り、そしてそのままあんぐりと口を開けて固まる。同じように、そのフロアにいるすべての人々が俺に注目していた。

俺はそれにかまわず、足音すら立てないよう、静かに静かに彼女に近づく。そして、あと数歩のところまで立ち止まると、おもむろに片膝をつき、指輪の入った箱を開け花束とともに、コムギに差し出した。

言葉はなくとも、俺の気持ちはきつと彼女に伝わる!

そう信じて、俺はモトハシの助言通り、ただひたすら無言で“静かに”コムギに求婚したのだった――。

プロポーズ大作戦 1

君に夢中なんだ。

そうささやくと、腕の囲いから手を伸ばしたコムギが真っ赤な顔で、ぎゅっと俺の頬をつねり上げた。

ひどく甘いその痛みに、自分の顔がとんでもなく緩んでいくのがわかる。彼女はなぜこんなに可愛らしいんだろうか。そんな気持ちを抑えきれずに、もう一度唇を寄せた俺に、コムギはゆっくりと目を閉じた。

ハレルヤ！

あの時、絶対に彼女は俺を好いてくれていると思っていた。

だがしかし、モトハシの助言通りプロポーズをした俺に、コムギは「絶交」を言い渡した。

ぽかんとしている彼女の右手に指輪をはめる俺に、その場にいた誰もが惜しみない祝福を贈ってくれたというのに。

きつと、突然のことだったからだろう。最初、俺の行動に真っ赤になったコムギは、次に周りのその反応を見て、今度はその顔を真っ青に変えた。そして、心配してその頭を撫でる俺の手を振り払い早口で何かをまくし立てると、さっさと俺を会社から追い払った。

やはり、静かすぎたのだろうか。帰り道、さきぼとの彼女の言葉を思い返して、自主反省会。

それとも、持っていた指輪が気に入らなかった？ 薔薇の本数が足りなかったとか？

なぜかはわからないが、何となくまた失敗してしまったことだけを理解した俺は、そのままひとり寂しく家へと帰ったのだった。コムギの家へと。

「あらあ、どうしたのオリーちゃん。しょんぼりして」

「ムツタア……」

「入って入って。今日はいいホッケが手に入ったのよ！」

にこにこしながらそう促すムツティに逆らわず、俺はうなだれたまま家の中へとお邪魔した。もうすでに、ここは第二のマイホームである。

成人して間もなく両親を失った俺にとって、コムギのムツタアやこの家は、夢に描いた温かい家庭の姿だった。

「はい、ココア。外は寒かったでしょう？」

そう言って手渡されたカップの温もりに、俺の涙腺はみるみるうちに崩壊した。

ココアを手にしてしくしくと泣く俺は、端から見たら情けないことの上なかつただろう。この姿をかつてのチームメイトが見たら、神に祈りを捧げるかもしれない。世界に終わりが来ないようにと。

しかしムツタアはただ優しく俺の頭を撫でてくれた。

「ムツタア、オリー、コムギに駄目って言われたです」

「いやねえ、あの子だったら。照れてるのよ、それは。昔からちよつと意地っ張りなのよね、麦子ってば」

ぼんぼんと自信をなくして丸まった俺の背を、宿めるようにムツティが叩く。そうして、手にしたままのココアを「冷めちゃうわよ」と勧めてくれた。

それに逆らわず一口飲めば、悲しい心の中に染みるように穏やかな甘さが広がる。少し、気持ちが落ち着いたのが自分でもわかった。そんな気持ちが伝わったのか、ムッタアはにっこりと笑う。

「大丈夫よ、オリーちゃん。麦子だって今頃言い過ぎたなあ、なんて落ち込んでる頃だから。一所懸命ちゃんと説明すれば、気持ちだって伝わるわ。オリーちゃんが諦めないかぎり、ねっ」

「Ja、ダンケシェーン、ムッタア」

ようやく顔を上げムッタアを見て笑顔になった時、玄関から恋い焦がれてやまないコムギの帰宅を告げる声が聞こえてきた。

俺は慌ててカップをダイニングテーブルに置くと、ムッタアに大きく頷いて見せ、急いでコムギのところへとむかう。そうだ、もう一度だけでもきちんと話そう。

俺がどんなにコムギを愛おしいと思っているのか、そばにいてほしいと思っているのか、それだけでも伝えたいんだ。

「コムギ！」

「どわあっ、おっ、オリー！？」

ひどく疲れたようなコムギの姿にたまらずぎゅっと抱きつければ、彼女は拒絶するでもなくそれを受け入れてくれた。

むしろ、恐る恐るではあるが俺の腰に手を回し、優しい手つきでさすってくれる。

その彼女の行動に俺は嬉しくなって、少し身をかめると頬をコムギの頭へと擦りつけた。

「痛い痛い痛いっ、痛いってば、オリー！」

「コムギ、オリーは話がしたいです！」

「わかった、わかったから、ちょっと離れてっ。首がもげるって！」

ばしばしと背を叩くコムギに、俺は名残惜しくもゆっくりと身体を離す。そしてコムギを見ると、彼女は頬を赤く染めたまま、二階の自分の部屋を指さした。

「とにかく、私も今日のこととか訊きたいことあるし。私の部屋に行こう」

「Ja!」

どこか怒ったように、ぶっきらぼうに告げられた言葉に俺は同意して、階段を上がるコムギのあとに続く。

コムギの部屋……それは、この前初めて深い深いキスをした思い出の場所でもある。どうか、最後まで理性が保ちますように、と気合いを入れて俺は神に祈った。

部屋に入るとコムギは鞆を降ろし、小さな丸いテーブル近くへと腰を下ろす。「座って」と俺も促され、大人しくコムギを抱えて座ろうとして、叩かれた。

「そうじゃなくて！ オリーはそっち！ 私の前に座るの！」

「えー」

「えーじゃないっ！」

思わず不満の声を上げた俺に声を荒げたコムギは、それでも大人しく指示に従った俺を見て、再び真面目な顔へと戻る。

腕を組んでこちらを睨む彼女は、可愛い。座っていても体格差によつて、少しこちらを見上げるようになる黒い瞳が、俺の理性を試しているかのようだ。頑張れ、俺。

「それで、どういうこと？ これ、どういう意味？」

コムギがテーブルの上へと置いたのは、昼間俺が彼女に渡したエングーリングの箱だった。多分、指輪はその中にそのまま入れられているんだろう。

身につけてもらえていないことに軽くショックを受けながら、俺は気を取り直して彼女へと説明を始める。

俺はコムギの笑顔が欲しいのだ。ずっと傍にいて、笑っていて欲しいのだ。

「オリー、コムギに楽しくしてもらいたい。だから、ダチに相談しました。ダチ、オリーに“静かに”やりなさいって言った」

ムッタアの言ったとおり俺は一所懸命コムギに説明するが、なぜか彼女の顔はだんだん曇っていく。どうしたことだろうか。

「静かにやるって、どういうこと？」

いつもと違って固く感じるその声に、俺は少し焦る。

どう言えば彼女はわかってくれるんだろう。できれば、ちゃんと彼女の国の言葉で、日本語で伝えたい。

コムギに喜んでもらいたくて、サプライズのプロポーズをしたのだと。サプライズ……サプライズ……これは日本語でなんて言うんだ？ ええと、確か……。

「ドッキリです！」

そう、多分この単語で合っているはず。

そう自信満々に答えた俺に、コムギは見る見るうちに顔を強張らせた。なぜだ？

「ドッキリ、って……」

「オリー、コムギ笑わせたい。だから、静かにこっそりドッキリしました。コムギ、楽しい？　コムギ、笑える？」

俯いてしまったコムギの顔を覗き込むように、そう俺は言葉を重ねる。

俺のこの気持ちはコムギに伝わったのだろうか。彼女の笑顔を、答えを知りたくて近づいた俺に、コムギはがばつと顔を上げると突然大きく腕を振りかぶって、そして。

「さいっていつ！　大っ嫌い！　出て行ってよ、オリーのばかあつ！」

叩かれた頬の熱さに呆然とする俺を無理矢理部屋の外へと追いやり、コムギは泣きながら部屋へと閉じこもってしまった。

俺はわけもわからず部屋の前に立ち尽くし、何度もコムギに声をかける。

しかし返ってくるのは沈黙ばかりで、仕方なく、俺は張り裂けそうな胸を抱えてムツタアのもとへと戻った。

ムツタアは俺の顔を見て何かを理解し、心配いらないと言ってくれたが、俺はその言葉に首を振ってコムギの家をあとする。

嫌われてしまった、その事実だけがひどく重く俺の心にのしかかっていた。

プロポーズ大作戦 2

（さいっていつ！ 大っ嫌い！ 出て行ってよ、オリーのほかあつ！）

愛しいコムギにそう拒絶されてから二週間あまり。俺は彼女とまったく顔を合わせることはなかった。

なにしろコムギは徹底的に俺を避けていたし、俺は俺でリーグが終盤戦ということで地味に忙しく、アウェイやなにやらも重なり、なかなかまとまった時間がとれない。

それに加えて、断り切れなかった取材を受けていたりしたら、あつという間にそれだけの時間が経ってしまったのだ。

俺は焦る。

もうコムギは俺のことなんか忘れてしまったんじゃないのだろうか。

もしかして、落ち込んだ彼女を誰か他の男が慰めていたりするんじゃないだろうか。

そんなことばかりが頭の中をぐるぐると回り、ついに俺はお気に入りのテディベアを抱いても眠れなくなってしまうていた。

『オリー、今日はいいいから早く帰って休めって』

目の下に隈をつくった俺にモトハシが声をかける。

俺が黙って首を振るとその背後から、いつかのスタッフがひよっこり顔を覗かせた。前に俺を怖がっていたその女性は、緊張したような面持ちでこちらになにかを差し出した。

そして意を決したように口を開く。

「あのっ、お疲れだつて聞いて……その、この栄養ドリンクけっこの効くんです！」

見ればその手に握られていたのは、金色のラベルの栄養剤。

言い切つて少し笑みを浮かべた彼女の手から、俺は驚きを隠せな
いままそれを受け取った。怖がられているとばかり思っていたんだ
が。

きよんとしたその顔がよっぽど面白かったのか、モトハシが笑
いながら俺の肩を叩いた。

『だから言っただろう。時が経てばわかってもらえるって』

その言葉に、改めて目の前でこちらを見上げるスタッフを見る。
彼女は緊張していて、けれども俺と目が合うとにっこりと笑って
くれた。

最初に会ったときには、こちらを見るのも怖がっていたのに。
ドリンクを受け取ったまま無言でいる俺の脇を、モトハシが肘で
つついた。ぱちり、と器用に片目をつむって見せ、俺に何かを促す。
そうか。

「ダンケシェーン！　オリー、ちょう頑張りますよ！」

できるだけ優しくそうに見えるように微笑むと、スタッフはとても
嬉しそうに笑顔を返してくれた。そして勢いよく頭を下げると、ス
タッフルームへと戻っていく。

その姿に俺は、ここしばらくのみんなのことを思い出した。
めっきり食欲の減退している俺を、ご飯を食べに行こうと誘って
くれたキーパーたち。来日してからの疲れが出てきたんじゃないか

と心配して、休みを調整してくれたフロント。いつも何かと声をかけてくれるモトハシ。他の選手たちもみな、最近は覚え立てのドイツ語で話しかけてくれていた。

そしてこの栄養剤。

不覚にも俺は泣き出しそんな心地になって、ぐっと奥歯を噛み締めた。

そうだ。諦めなければ、伝えようと努力すれば、きっと気持ちは伝わるんだ。

俺はコムギに対して自分を押しつけるばかりで、きちんと彼女の気持ちを考えていただろうか。わかってほしいと言っぱかりで、彼女の言葉を訊こうとしただろうか。

『元気が戻ってきたみたいだな、オリー』

『モトハシ！』

『俺の知ってるビルケンシュトックは、一回の失敗くらいじゃ諦めない奴だったと思うけどなあ？』

いつもの彼の笑みに、俺は大きく頷いてみせる。

大事な試合でミスしたときもあったし、あと少しのところで力及ばず優勝を逃したこともあった。けれど俺は絶対に諦めなかったから、今こうしてここにいるんだ。

『ということではい、これチケット。ホーム最終戦のやつ。これ持って会いに行つてこいよ』

『モトハシ……！ オリーはモトハシが大好きですよ！』

「なんでそういうとこだけ日本語になるんだあああ」

叫ぶモトハシをぐっと抱き締め感謝の意を表すと、俺はありがとうそれを受け取り、彼が勧めてくれたようにそのまま早めにグラウンドをあとにした。

コムギにこの気持ちをわかってもらえるまで、コムギの気持ちを聞かせてもらえるまで、絶対に踏ん張ってみようと心に誓って――。

ところが、である。

コムギの帰宅を、彼女の家の前で――今日はムツタアが留守であったため――待っていた俺の目に入ってきたのは、抱き合うようにして歩いてきた男女の姿。

薄暗い街灯の明かりに照れされたその顔は、間違いなく俺の愛するコムギ。そして、その身体に手を回して歩いてくるのは、俺の知らぬ男。

それを見た瞬間、体中の血液が沸騰したような、反対に凍り付いたような。そんな強く複雑な想いが駆けめぐり、俺は無意識にその二人に向かって駆け出していた。

「コムギ！」

ありったけの大声を出して近づくと、名を呼ばれたコムギよりも先に、男のほうがびくりと肩を揺らしてこちらを見た。

一見すると真面目そうな若い男。そいつはなぜかぐったりとしているコムギの腰に手を回し、その身体を支えている。俺は威嚇するようにそいつを睨み付けた。

「コムギ、どうしたですか！ あなたは悪いことをしてますか！」

「えっ、あの、俺……」

「Schheisse！」

吐き捨てるようにそう言って、俺は強引に男からコムギの身体を
かつさらう。

その小さくて華奢な身体をそつと持ち上げると、俺は再び目の前
の男を射殺す勢いで睨んだ。男はその俺の顔をまじまじと見つめ、
それからなぜか満面の笑みを浮かべる。

「ビルケンシュトックさん！？ オリヴァー・ビルケンシュトック
さんですよね！」

「……Ja」

「すつごい！ 本物！ 俺、ドイツ代表のファンで、ビルケンさんの
ことすつごい尊敬してました！ チャンピオンズリーグのPKの
時とか、マジ神がかってて…… やっぱい、俺本物に会っちゃったよ
！」

なんだか変な方向に行っている気がする。

男のあまりに無邪気な様子に、俺は入っていた肩の力が抜けてい
くのがわかった。どうやら、俺が考えていたようなことではないら
しい。

抱え上げられ、俺の胸に寄りかかったコムギが低く唸る。それに
気がついた男が、あつと声を上げて口を開いた。

「今日、会社で早めの忘年会だったんですけど、なんか鈴木さんす
つごくペース早くて、潰れちゃったんですよ。普段はこんなことな
いんですけど……。それで俺が同じ方向だってことでここまで連れ
てきて……。あつ、変なこととか下心とかまったくないですから！
俺、ちゃんと彼女いるし！」

ころころと変わる表情に完全に毒気を抜かれた俺は、わかったと
いうように頷いてみせる。とりあえずこいつは悪い奴ではないらし
い。

「ダンケシェーン、あー……」

「木村です!」

「ダンケ、キムラ。コムギ、オリーが持って帰ります」

ぺこりと日本風に頭を下げると、キムラはひどく恐縮してしまった。そこでモトハシからもらったチケットが二枚あることを思いだした俺は、お礼にとそれを彼に渡す。すると、キムラは目をきらきら輝かせて喜び、「必ず彼女と見に行きますっ」と宣言し、来た道を戻っていった。

サッカーを愛する人間に悪い奴はいない。

俺はひとつ大きく頷くと、気持ちよさそうに眠ったままのコムギを抱え直し、家へと歩みを進めた。まあ、とりあえず俺のうちに運んで寝かしつけよう。

寝室のテイベアに囲まれ眠るコムギを想像し、俺はちよつとだけ湧いた下心を神に懺悔した。

プロポーズ大作戦 3

すやすやと、俺のベットでティディベアに囲まれ眠るコムギ。
そのあまりの可愛らしさに焼き切れそうな理性をなんとか押しとどめ、俺は「これくらいなら……」とか思いつつ、携帯電話でその寝顔を写したりした。ここまでなら、まだカードは黄色のはず。
そしてゆっくりと髪に手を滑らせ、そのなめらかな感触を楽しんでいるうち、いつの間にかうとうととしてしまっていたらしい。

「オリー、オリーってば！」

ぺちぺちと小さな手に頬を叩かれ、俺は深い眠りの中から意識を浮かび上がらせる。ゆっくりと目を開くと、目の前には天使。

ベットサイドの小さな明かりに照らされて、真っ直ぐな黒髪が濡れたように光っている。それと同色の瞳は、どこか気まずそうに俺を見つめ、小さな唇から俺の名前がこぼれた。

「オリー、起きて！」

「コムギ……？」

ベットの隅にうつぶせになっている俺の頭に、コムギの華奢な指がそつと触れた。あまり上等とはいえないだろうこわついた髪を、さつき俺がそうしていたようにゆっくりとすいてくれる。

ここはなんていう天国なんだろうか。

俺がそんなことを考えながらまた瞳を閉じようとする、その手が頬をぎゅっとなんだ。痛い。……痛い？

そこでようやく、はっきとした意識が戻る。

がばりと身を起こした俺は、今し方つねられた頬に手をあて、それからベットのの上にちょこんと座るコムギを見た。

「ようやく起きた！　ずっと呼んでるのに、全然反応ないんだもん。黙って帰るに帰れないし」

少し拗ねたような言い方に、俺は胸がぎゅっと掴まれたような感覚を覚える。この目の前の可愛らしい人は、もう俺と目も合わせてくれないんじゃないかと、そう絶望していたのに。

泣きそうになりながら恐る恐る伸ばした俺の手を、コムギは拒絶することなくじっと見つめる。

そうつと触れた頬は、アルコールの余韻が残って少しだけ熱い。目の下を親指で撫でれば、コムギはくすぐったそうに身をすくめた。そして、両手でそつと俺のその手を包み込む。

「コムギ……コムギ、ごめんなさい。ごめんなさい、だから聞いて欲しい」

「オリー？」

頬から手を外し、包んでくれていたその手を改めて握り直して、俺はもう一度自分の気持ちを伝えることから始める。

何回でも、何回でも。つたない日本語でも、わかってももらえるまで。

「オリーは、コムギの笑顔が好き。天使みたい。コムギが笑うと、オリーの胸がとってもあったかい。だから、オリーはずっとずっとコムギに笑顔してほしい」

どこに恋したのか、なんで彼女だったのか。

一目惚れなんて本当に存在するのか……そんなこと、本当にどう

でもいいくらいにコムギが好きだ。

この出逢いのために全部の運を使い果たしたんだって言われても、ちっとも惜しくなんかない。むしろ、それ以上のものを、もうもらった気分にいる。

俺の言葉に、戸惑ったように彼女の黒い瞳が揺れた。

「オリーの隣で、いてほしい。他の男性に笑うの、だめです。オリーはコムギを独占したい。だから、指輪買いました。コムギ、指輪嫌い？　オリーのこと……嫌い？」

「え……」

一番訊きたくて、一番訊きなくなかったことを告げると、コムギは大きな瞳をさらに大きく見開いた。握っている手が、少し震える。その右手の指のどこにも、俺が贈った指輪はつけられていない。それがすべての答えのような気がして、俺は不覚にも泣きそうになってしまった。コムギの手から片手を外し、慌てて顔を覆い隠す。情けないことこの上ない。

そのままひどく落ち込んでいきそうになった俺の頬に、今度はコムギの手が触れた。ちよつと髭がそり残されたそこを、小さな手が撫でていく。

俺がびっくりして覆っていた手を外すと、真剣にこちらを見つめるコムギの瞳に囚われた。

「ねえ、ドッキリってどういう意味なの？」

問われた言葉の真意がわからず、俺は軽く首を傾げた。すると、むにゅと再び頬をつままれる。少し痛いけど、嬉しい。

思わず緩んだ顔を見て、コムギは機嫌を損ねたように眉を寄せた。

「真剣に訊いてるのっ！　大事なことなんだからね！」

「Aua! 痛いですよ、コムギ!」

その声に限界まで引つ張られた頬をぱつと離して、コムギは不機嫌な表情のまま俺を睨む。腕組みをして、怒っているんだぞというアピールをするコムギは、やっぱり可愛い。

今、携帯を取りだしたら……駄目だろうな、やはり。

俺はじんじんする頬をさすりながら、さっきのコムギの問いに口を開いた。

「ドッキリは、コムギをびっくりさせる。びっくりするのは、喜ぶですね。オリーの日本語、間違ってますか? サプライズ、ドッキリ言わない?」

「サプライズ……のことだったの?」

「Ja」

逆に問い返されて頷けば、なぜかコムギは後ろに向かって倒れ込んでしまう。

まさか気分でも悪くなったのだろうか、とびっくりしてベットに上りその顔を覗き込めば、コムギは瞳を涙で潤ませていた。

泣いてる! 俺のせいかな!? そんなにプロポーズが嫌だったのか?

軽くパニックになる俺に気がつかず、コムギはぼろぼろと涙を流しながら俺を見る。

「馬鹿オリー! そんなの、ドッキリって言わないよっ」

「コムギ、ごめんなさい。コムギ、怒った? オリーのこと嫌い?」
「違うの!」

仰向けになっていたコムギががばりと起きあがり、覗き込むようにしていた俺の首に強く強く抱きついた。

突然の柔らかな感触に戸惑いつつ、それでも俺はその身体を壊さないようにそつと抱き締め返す。これは……どういうことだろうか。肩に寄せられた頬から涙が流れていくのがわかって、俺はとりあえず宥めるようにその薄い背中を優しく撫でる。

すると、耳元で涙に濡れたコムギの声が聞こえてきた。

「ドッキリっていうのは、いたずらってことだよ、オリー。私ね、オリーにからかわれたんだって思ったから怒ったの。プロポーズされたと思ったのに、それがいたずらなんだよって言われたから、すごく悲しかったの」

「コムギ……違いますよ、コムギ。オリーはいたずらしてないよ！オリーはコムギにプロポーズしましたよ、本当のことですよ！」
「うん……」

うち明けられた言葉にびっくりして、俺はコムギの顔を見ようとその身体をゆっくり離す。

覗き込んだコムギの顔は涙に濡れて、けれど何だかとても嬉しそうに微笑んでいた。それは、俺が一番見たかった彼女の微笑み。

本物の、俺の天使。俺だけの。

何だかとても眩しく感じられて、俺は少し目を伏せ、そして吸い寄せられるようにその唇に自分のそれを近付ける。コムギは頬を染め、拒絶することなく俺を受け入れてくれた。

最初は軽く重ね、それから舌で可愛らしい下唇を舐めてやると、コムギはくすぐったそうに身をよじる。それがまたたまらなく愛おしくて、唇で唇を挟みこみ、その先を促した。

恥じらうように薄く開けられたそこに、深く、深く俺が入り込む。直接的な感触を甘いと感じるのは、俺の頭がもういかれてしまっているからだろうか。

それでもこの腕に彼女がいて、こうして口付けができるのなら、もうそれでいい。

それ以上いけばもう戻れない、というぎりぎりのところで俺はなんとか踏みとどまり、コムギから唇を離した。

ひどく名残惜しくて、そのまま鼻や目元に口付けると、彼女はうつとりとした吐息を漏らす。俺の我慢は限界だったが、でもまだ肝心なことを彼女に訊いていない。

この先は、それからでも遅くはない！

「コムギ、オリーと結婚してくれますか？」

両手で小さな小さな顔を包み込み、そう真面目に問えば、コムギはその手に手を重ねにつこりと美しい笑みを俺にくれる。

軽く頷いて、さっきとは違う感情のこもった涙を流して。

「仕方がないから、オリーのパンツ、毎日みそ汁で洗ってあげるよ！」

その言葉に、俺は比喩ではなく本当に天にも昇る気持ちでコムギを抱き締めた。世界で一番の幸せを手にしたのは自分だと、今ならどこへ向かつても恥ずかしくなく宣言できる。

そうして俺はコムギと一緒に寝転がる。ここがベットの上だなんて、最高の奇蹟だ！

俺はコムギの額に軽くキスをすると手を伸ばし、ベットサイドの明かりを落とした。

明日の朝、この天使を腕に抱いて目が覚ますことできるそのことを、神に感謝しながら――。

プロポーズ大作戦 3（後書き）

オリ編、これにて完結です。ありがとうございました。
この後、ちょっと時間をおくかもしれませんが、番外編を書いてみたいと思います。

ゴールキーパーはテディヘアの夢を見るか？（前書き）

直接的な表現はありませんが、事後の雰囲気があります。
苦手な方はご注意ください。

ゴールキーパーはティディベアの夢を見るか？

(コムギーっ！ コムギコムギコムギーっ！)

真っ暗闇の中、私はなぜか巨大なティディベアに追いかけていられた。

真っ黒なビーズの瞳にふかふかの茶色い身体。丸く可愛い耳をぴこぴこと動かしながら、水兵さんスタイルのそのクマは嬉しそうに私の名を呼び走ってくる。しかも、顔に似合わず野太い声で。

当然、私は全力疾走で逃げまくる。じよ、冗談じゃない！

いくら相手が見るからに柔らかそうな、可愛いぬいぐるみであつても、自分の十倍もありそうなものがどすどすと走ってくれば、逃げる。

(コムギーっ、大好きですよ、コムギーっ)

(ぎゃああああ、来ないでええええっ)

くりんくりんの毛に包まれた丸い手がこちらに伸ばされ、抵抗虚しく私はその巨大ティディベアに、呆気なく捕獲されてしまった。そのままぎゅうぎゅうと抱き締められる。

よっぱどいい素材なのか肌触りはよく、押しつけられる丸いお腹もちょうどよい弾力。これが普通サイズで家にいたなら、私も素直に愛でられただろう。

けれど。

(コムギー！)

体毛が鼻に入ってこそばゆいとか、もう、そういう問題じゃない。息もつけぬほどの強い抱擁に、私は命の危険を感じ、必死に手足を動かしてそこから抜け出そうと試みる。が、そんな私を逃がすまいと、そのデディベアはさらに腕に力を込めてきた。

(Ich liebe Dich!)

くくくく、苦しいiiiiiiiiiiiっ！

このままでは死ぬ、と遠く意識の中でそう思った瞬間、私はぱちりと夢から目を醒ました。

目の前には見慣れない部屋の壁。控えめな青色で塗られたそこに、うつすらとした光があたって、まるで海の中にいるような錯覚を覚える。

ここはどこだっけ、と思う前に、先ほどまで見ていたのが夢だとわかり、ほっと息を吐いた。……いや、つこうとして、ひどく胸が苦しいのに気がつく。

何かが私のお腹に巻き付いて、そこを締め上げている。く、苦し
いっ。

あんな夢を見た原因はこれかと、とにかくそれを取り外そうとして……。

それは人間の腕。

光が当たって輝く薄い色の毛に包まれた、男の人の。

私の倍はありそうな、がっちりとした筋肉質の、腕。

オリーの。

そこまで確認すると、それに釣られるように甦ってきた昨夜の記憶に、私は声にならない悲鳴を上げてしまった。意味もなくじたばたと暴れてみる。

その動きに、腕の持ち主であるオリーが、私の背後でもそそそと

動く気配がした。背中側があつたかいと思つたら、彼は私を抱きかかえるようにして眠っているらしい。

大きな大きな体温に包まれた私は、まるでぬいぐるみにでもなつたよう。

ぬくぬくで、少し気だるくて、胸を占める安心感に私はため息をつく。そして何だか薄れていく意識に、これが幸せつてやつなのかなあ、と思い始め――再び覚醒。

いやいやいや、違う違う。これ、酸欠だから！ 惑うことなく酸欠だから！

「オリーっ！　ねえ、ちょっとオリー！」

べしべしと唯一自由になる手で、腹に回つたオリーの腕を叩く。すると、背後の身体がまたかすかに動いて、冬眠明けのクマのような唸り声が聞こえた。耳元で低く掠れたその声に、自分の中のどこが不快でない震えを覚える。

ち、違う！　そんなうつとりしてる場合じゃない！　命危険！

「起きてつてば、オリー！　苦しいんだつてばあつ！」

遠慮容赦なく後ろに向かって入れた肘が少しは効いたのか、ようやく腹を締め上げていた腕がゆるまった。そこでようやく深呼吸。

真面目にちよつと花畑を見た。あ、危ない……。

いまだ抱きかかえられたまま、それでも少しは自由になった私は、改めて部屋の中を見渡した。

もうすでに日は高いところまで昇っているらしい。小さく灯つたベット脇のスタンドより、薄く引かれていたカーテンから入ってくる光のほうに、強く部屋の中を照らしていた。

目が覚めて初めてに見た薄い青色の壁。落ち着いた緑色のカーテン。それがかけられた窓辺に置かれているのは、小さな観葉植物。空い

た壁のスペースには、水色のユニフォームと赤いタオルマフラー。
ベットサイドのシンプルな棚の上に、電気スタンドと何個かの写
真立て。その中で笑う小さな頃のオリーと、優しいような男女の姿。
これは、お母さんとお父さん？

そうしてなんとか顔をそらしてベットの上を見ると、そこにあっ
たのは――。

「く、クマ？」

ちよこんと行儀よく並んだ六体のクマ。

それぞれに個性的な服と姿をして、黒い瞳がこちらをじっと見つ
めていた。

ある子はどつかで見たような水兵服に身を包み、ある子は首に大
きな赤いリボン。毛並みも短いベージュから、くるくると癖のある
焦げ茶色と、多種多様。

それにしても、なぜ、クマ！

む、とその疑問に眉を寄せた時、そこに柔らかなキスが降ってき
た。

「モルゲン、コムギ……」

「うあおっ、おっ、おはよう、オリー！」

挨拶というには少々過剰なほどのキスに、私が動揺しながらなん
とかそう返す。すると、少しか身を起こしてこちらを覗き込んで
いた青色の瞳が、すっと優しく細められた。

ひどく甘ったるいその顔に、知らず知らず頬が熱くなる。

確かにゴリラというか、ドイツ式なまはげというか、いかつい
だけでも。でも、基本的にオリーって整った顔をしてるんだよね。

左右対称で、鼻がすわりと高くて、金色の眉毛はちょっと薄く感
じるけど、その下にある瞳は深い青色でとても綺麗。こんな近くで

見て初めて、睫毛まで金色なんだってわかった。
つまり、こんな近距離で微笑まれると……照れる。

「コムギ、身体痛いですか？ オリー、昨日頑張りましたよ」
「そういうこと言わないっ！」

満面の笑みで甘い空気をぶち壊したオリーの頬を、私は軽くつねってやる。すると、へらりとさらに相好を崩したオリーは、私のその手をそつと掴むと、そこにも軽く唇を当てた。

なっ、なんじゃこりゃあああ！

酸欠の金魚のようにぱくぱくと口を開け閉めする私に、続いてちゅつとリップ音を立ててキスをする、オリーはベットのの上に起きあがった。

何も身につけていないその上半身に、羊子ちゃん並とはいかないまでも、筋肉大好きな私の目が釘付けになる。

厚みのある肩に、背中に、綺麗についた良質の筋肉。どこにも丸みのない身体は、すべて真っ直ぐな線で構成されている。女性の、曲線でできた身体とはどこもかしこも違う、安定感のある造り。

その腕に、胸に、身体全体に包み込まれると、もう怖いものなんてなんにもないって気持ちになる。何があっても、大丈夫。

じつと見つめる私の視線に気がついたオリーが、ちよつと照れたようにその頬を染めた。

「コムギ、オリーの身体、気に入りましたか？」

「だからっ、そういうこと言わないでってばっ」

直接的な表現の、その裏に込められた意味まで正確に理解してしまった私は、真っ赤になってオリーの腕をぺしりと叩いた。

嬉しそうに笑ってオリーは、ベットから立ち上がり、下に落ちていた衣服を手早く身につけていく。異性の生着替えなんて刺激が強

すぎて、私は慌てて目を逸らした。み、見てないからねっ、あんなところやこんなところなんて、見てないからねっ！ お尻にえくぼができてるなんて、思ってたないからねっ！

ぶるぶると頭を振りながら私も毛布で身体を隠し、自分の服をかき集める。ちよつとしわになっちゃってるけど、まあ帰る家は隣だし、この際気にしないで身につける。

しかし、ものすごく気恥ずかしい。はたしてこれに慣れることができるんだろうか、私。

ん？ 慣れるって慣れるってなんだ！？

自分のその想像力に頭を抱えていると、突然ふわりと抱き上げられて、気がついた時にはオリーの腕の中にいた。

背後にそろそろ馴染みつつある、少し高めの体温。

するつと髪をかき上げられ、うなじに唇の感触。それが恥ずかしくなるくらいの音を立て、そこにひとつ、キスを落として離れた。

「コムギ、辛いですか？」

「ただただ、大丈夫だってば！ ええと、その、あの、いっぱい気を遣ってもらって、えっと」

いかん。口を開けば開くほど、どつばにはまっていく。

こういう時なんて答えればいいのかなんて、そんな道徳の教科書にも書いてなかったよ！ 書いてあっても嫌だけど！

なんとか、なんとかさういふ話題から離れなければ、ときよろきよると視線を巡らせる私の目に飛び込んできたのは、さつき見たいた六体のクマだった。

「おつ、オリー！ なんでこんなにクマがいるの！？」

「Nein！ クマ違います。ヴィンセント、アンゲラ、ルートヴィヒ、ヨアヒム、ハイディ、ミヒヤエルですよ！」

「わかんない、ドイツ人わかんない……」

どうやら一体一体に名前までつけているらしいオリーに、私はさつきとは別の意味で頭を抱えた。これがドイツ基準なの？ いや、絶対違うだろうな……。

そんな私に構わずに、オリーが綺麗に並んでいるテディベアの中から、ひとつを取りあげて私に差し出す。

「オリー？」

「ヴィンセントです。オリーのムッタアとファータア、オリーが短い頃くれました。オリーの一番のフロインドウ。誰もいなくなっても、ヴィンセントがいてくれました」

「オリーのお父さんとお母さんがくれたの？」

「Ja」

そつと背後から私の膝に乗せられたそのクマは、小さな頃から一緒だという言葉通り、少しでも毛羽だつてしまっている。けれど、とっても大事にしてきたんだろう。ちつともくたびれた感じはしなかった。

私が優しく頭を撫でてやると、オリーはクマごと私をぎゅっと抱き締める。

「ムッタアとファータア、ワーゲンにぶつかりました。だからオリーは、ひとりです」

肩口に埋められた唇からそんな言葉がぼつりとこぼれ落ち、私ははつとしてベットサイドに飾られた写真に目をやった。

優しそくに、楽しそくに、幸せそくに笑うオリーと両親の姿。それはまだ少年といつてもいい姿をした彼までで、大人になってからのものはない。ワーゲン——車の事故で……？

「オリー……」

今、彼はどんな顔をしているのか、背後から抱き締められている私には見えない。

もしかしたら見せたくないのかもしれないけど。それでも、私は彼をぎゅっとしてあげたくなって、何とかもぞと動いてみる。すると、突然またふわりと身体が浮いて、今度はオリーと顔を合わせるような体勢に変わった。

驚いて腕の中のクマを抱き締める私に、オリーはにっこりと無邪気な笑みを浮かべてみせる。

「だから、コムギ。ふたりは、いっぱいいっぱい子供、作りますよ！」

なに、その、超展開！

ていうか、今の今までであった私の切ない気持ちを返して！

あまりのことに言葉を失った私に気がつかず、オリーは額に頬にとまたキスを降らせていく。ちょ、ちょ、ちょ、ちょ！

「子供っ、子供って！」

「Ja！ オリーはサッカーチーム作るですよ！ いっぱいで賑やかは素敵で楽しい！ コムギも一緒に頑張る！」

「ちょっ、ちょっと待って、頑張るって頑張るって、えええええ！」

素早い仕草で腕の中のクマを取り上げられたかと思ったら、なんでもかそのまま再びベットへと寝っ転がされ、私は悲鳴を上げる。

じたばたと暴れる私をマウントポジションで見下ろし、オリーは「コムギ、落ち着いて」なんて声をかけてきた。

いやいや、どう考えてもそっちが落ち着いてよ！

するつと耳元から首筋に流れた、厚く固い感触の手のひらに、私

の身体が知らずに揺れた。それを見て、オリーはますます嬉しそうに笑う。

ちちちちち、違うつ、これは違うのっ！

「コムギ、可愛い……」

近づいてきたその青い瞳が、もはや止められないほどの熱を孕んでいるのが見え、そして私の言葉も何もかもが唇の中へと吸い込まれてしまう。

上唇を軽く食^はまれ、背筋を走る甘い痺れに思わず開いたそこへと、オリーの熱が入り込んで追いかけられる。そんなことを繰り返しているうちに私の身体からはすっかり力が抜けて、それを感じたのだからオリーはそつと身を離して微笑んだ。

「頑張りましょう、コムギ！」

息も絶え絶えでそれに反論もできない私は、オリーのそのあらゆる意味でやる気満々の顔をただただ睨み付けるだけだった。

そしてそれが、ますます彼の熱を煽るだけのことだったと知るのは、また別のお話。

とにかく今は、再びゆっくりと近づいてきたオリーの瞳にそつと目を閉じ、私はそれを受け止めることに集中した――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0649z/>

ドイツさんと私

2011年12月13日02時52分発行